

「新型コロナウイルス発生の裏にある“自然からの警告”」



掲載 URL <https://www.youtube.com/watch?v=1g3Y36z772Q>

【概要】

- **新型コロナウイルスの原因も生物多様性の破壊にあるのではないか**
 - ウイルスの拡大には生物多様性という環境問題が深く関わっている
 - 生態系を含む生物多様性が急速に劣化し人間社会にも大きなリスクとなっているが、破壊しているのは人間活動によるもの
 - 病原体にも本来の生息地があるが、その生態系を破壊することが新興感染症の出現につながる。そして、グローバル化により感染症が急速に拡大するようになった

- **生物多様性の破壊を減速させ、自然共生社会を構築すべき**
 - ゾーニング（野生生物と人間の社会の線引き）

- **グローバル化から脱却し、ローカリゼーションと持続的社会へのパラダイムシフトを図るべき**
 - 「地産地消」（地域経済行動の確立）が行動変容として踏み出すべき第一歩

※ 動画から環境省が概要作成

（参考）【5月22日の国際生物多様性の日に寄せたメッセージ】**（環境省 facebook 掲載）**

国立研究開発法人国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター

生態リスク評価・対策研究室 五箇公一室長より

今回のコロナ騒動で私たち人間は、自然共生の真の意義と向き合う必要性を突きつけられた。

このウイルスは自然界の中で野生動物の中でひっそりと生きていた。それを人間が自然破壊を繰り返す中で、人間社会にスピル・オーバー（噴出）し、グローバル経済に乗って瞬く間に全世界に拡散してしまった。

人類史上、これほどまでに急速に全球レベルでパンデミックを果たした感染症は類を見ない。まさに現代のグローバル社会が生み出したシン・ゴジラ以上のモンスターである。

同時にこのウイルスは、人間の行動変容を求める生態系からの使者といってもいい。

生態系は、美しい空気や水、豊富な食料資源を供給してくれる、安定した生物圏を維持してくれるという、人間社会にとってはなくてはならない機能を生み出すシステム。

そのシステムに多種多様な生物がパーツとして組み込まれており、すべての種が機能連鎖のなかで重要な役割を果たしている。

一見して生態系の中では生物種同士は、お互いに支え合い、人間もその中心にいるような錯覚（幻想）を抱きがちだが、実は生物の世界はそんな甘いものではなく、常に自分の遺伝子のコピーを少しでも多く残さんと個体同士、種同士、お互いに隙あらば相手の「取り分」や生命すらも奪おうとせめぎ合って生きている。

生物の究極的生存意義は「奪い合い」にある。

増え過ぎれば、天敵のいい標的となり、減り過ぎれば絶滅の淵に立たされる。絶滅すれば、代替りの種がすぐに進化してその穴（取り分）を埋める。生態系とは支え合いで成立するシステムではなく、足の引っ張り合いの張力でバランスが取れている世界。

そんな世界の中に人間も裸で放り出されれば、あっという間に野生生物の餌食となってしまう。

人間という最弱動物がこの地球で生き残れたのも、ヒューマニティという赤の他人をも思いやる「助け合い（相互互惠）」の形質が進化したからこそ。

文明と文化を手に入れたことで人間は、生物多様性に立ち向かい、対等に生きるチャンスを得て、今の繁栄を得た。まさに、人間社会の歴史は生物多様性との戦いの上に成り立っている。

そんな人間も化石燃料を手に入れてから、人間という種本来の能力をはるかに超えたパフォーマンスを手に入れ、破壊と略奪の限りを尽くし、今や生物多様性と対等な関係ではなくなってしまった。

その結果、生態系システムにも狂いが生じ、水資源の枯渇、汚染、温暖化といった環境問題を引き起こしている。

そして増え過ぎてしまった人口は、自然の摂理から天敵の格好の標的となり、我々人間もいよいよ食われる立場に立ち始めた。その天敵がウイルスである。

この新型コロナウイルスは、人間に自然の猛威を思い知らしめただけでなく、人間の「利他的」な精神が試された。

このウイルスの恐ろしさは、エボラのようにかかった本人が死に直面するという恐怖ではなく、膨大な不顕性感染者がいることで、相手に感染させて、相手を殺してしまうかもしれないという不安と恐怖をもたらすこと。その一方で「自分さえよければいい」という原始的かつ利己的な性も呼び起こす。

特に都市化が進んだ日本では、自然の脅威からも離れ、自分一人で生きていけるという環境が、人のことより自分のこと、今の自分が大事、という利己性が優先される。

このウイルスを制するのは「利他行動」(つまり相手を思いやる心と行動)をちゃんと人間がとれるかどうかにかかっている。それは、人間の「今の自分が一番大事」という性から抜け出せるかどうかにかかっている。

このウイルスは実にしたたかで、不顕性感染というかたちで姿を消すことで、人間が活発な経済活動が続ける限り、永遠に人間社会で巡回し続けることができる。人間の欲望という性に巧みに潜んで生き続けるウイルスだと言える。

新型コロナは瞬く間に全世界に感染拡大したことで、いま人類全体が利他的な humanity を試されている。

この新型コロナは我々人類の自然との向き合い方・関わり方に大きな誤りがあったこと、そしてこれからの自然共生のあり方を考え直す必要性も突きつけている。すなわち未来世代という「他者」に対して「利他的」な行動変容を取れるか否かが問われている。

これからも人間がこの地球上で生き延びて、社会の持続性を維持していくためには利他的 humanity を取り戻し、そして、自然に対しても「利他性」をもって向き合っていかななくてはならない。他種の取り分を取り過ぎず、他種の住処を荒らさず、ときには他種を慈しみ、ときには他種と対決し、生物多様性と対等な関係をつくりあげていくことが課題となる。

持続的社会実現のための自然共生のあり方のヒントは、我々日本人の祖先たちが築き上げてきた歴史の中にある。縄文から1万年も続いた循環型コンパクト社会、江戸の鎖国時代を支えた地方分散型社会、これらのシステムに現代社会のテクノロジー(インターネット、AI、3D、バーチャルリモート・・・)および自然再生エネルギーを組み合わせることで、日本は地方でも豊かに楽しく安心して暮らせる自立型・循環型社会「ネオ里山」を構築することができる。このシステムはかねてから唱えられている「里山イニシアティブ」として、世界の指針にもなるであろう。

コロナの後に理想社会に向けて我々はまず個人として何ができるのか。その一步は「地産地消」。自分の足元・地元から循環型経済の一步を踏み出そう。